

島根・トップコーチ

(第92号)平成23年1月20日

【発行】 財団法人 島根県体育協会

【担当課】 競技スポーツ課

〒690-0015

島根県松江市上乃木10丁目4番2号

島根県立水泳プール内

TEL 0852(60)5052

<http://www.shimane-sports.or.jp>

【第92号発刊にあたって】

第92号は、島根スポーツのシンボルとして島根大学卒業生のみならず、多くの人々の心に刻まれている故・佐藤不二男先生(元島根大学教授)について書かせていただきました。

先生は自ら競技者としてバスケットボール、陸上競技、柔道、バレーボールで活躍され、全て一流の足跡を残されました。なかでも「陸上競技・十種競技で日本選手権二連覇」「幻のオリンピック選手」「東京オリンピック・バレーボール日本代表男子の強化トレーナーとして銅メダル獲得に導かれた」こと等はあまりにも有名です。これからの若い指導者に是非「佐藤不二男という人」の存在を知っていただきたいと思えます。

自伝「汗・・・我がスポーツ人生」、その他の資料から「佐藤不二男という人」というテーマで文章を抜粋したり、コメントさせて頂きました。

『佐藤不二男という人』

「汗・・・我がスポーツ人生」から

このなかで永井康宏氏が語られている「佐藤先生とスポーツ」では・・・先生は偉大なスポーツマンであったが、また、優れた指導者でもある。教師として勤務された安来小学校、師範附属小学校、旧制松江高等学校、島根大学教育学部はもとより、コーチされた日本の代表チーム、県内・県外の学校などで、優れたスポーツ選手や指導者を輩出するにいたっている。このことは、先生の年譜を一見することによって理解される。

主な経歴と活躍の跡

- t 3 隠岐・西の島町出身
- s 4 島根県師範学校へ入学
- s 7 全国中等学校バスケットボール選手権大会初出場
(島根師範学校チームとして、全国大会出場への先駆となる)
- s 8 明治神宮バスケットボール大会
(現・国体)出場
- s 10 島根県柔道選手権大会個人優勝
- s 11 第8回明治神宮大会で砲丸投
(4位)(バスケットボール、柔道の三種をかけもち出場)
- s 12 全山陰陸上選手権大会・五種競技で日本十傑1位
(十種競技に専念し、東京オリンピックを狙う)
- s 14 日本陸上選手権大会兼明治神宮大会・十種競技で優勝
- s 15 島根師範学校勤務
- s 15 日本陸上選手権大会兼明治神宮大会・十種競技で連続優勝
(東京オリンピック中止の為、出場の夢消える)
- s 22 全日本バレーボール東西対抗に出場
第2回国体バレーボールで準優勝(紅稜クラブ)
西日本総合バスケットボールで準優勝(全島根)
- s 23 全日本バレーボール東西対抗に出場
- s 24 全日本バレーボール東西対抗に出場
- s 26 全日本バレーボール教員男子で準優勝
- s 27 ~ 29 全日本バレーボール教員男子で優勝(3連覇)
- s 30 第1回アジアバレーボール大

- 会・日本チームトレーナー
中国体育文化賞受賞
- s 3 2 わが国初の6人制バレーボールの入門書「国際式6人制バレーボール」出版
- s 3 6 日本男子バレーボールチーム・トレーナーとしてヨーロッパ遠征
(その後、島根大学で東京オリンピック候補選手の強化トレーニングが行われた)
- s 3 7 島根大学教授
- s 3 9 東京オリンピック大会男子バレーボールチームのマネージャー兼トレーナー(銅メダル獲得)
- s 5 2 島根県体育協会副会長
- s 5 3 定年退官
- s 6 2 勲三等旭日中綬章を受章

50年間の思い

「汗・我がスポーツ人生」から

・・・迷いもなく、ためらいもなく、一筋に燃やし続けてきたスポーツへの情熱。多くの友を得、世界を旅し、数えきれない程の教え子の成長を楽しみながら、自らも健康で、年齢相応に体力を維持し続けることの出来た私の今までの人生は、幸せであった。

私の選んだ道が、「教育」・もっと直接的に言えば、「体育」であったことが良かったかも知れない。スポーツに精魂をかたむけることが、そのまま教えるということの源を培うことにもつながって、指導の内容も豊かになり、学生諸君と共に汗することの喜びも味わい、時には、牽引車としての役割も果たすなど、スポーツと職務との両立に悩まされることは一度もなかった。

50年の中には、日本を根底からくつがえした「戦争」が含まれている。そしてその戦争が、私のかげがえのない人生の、一番大切な年代を完全に塗りつぶし、青春の夢であったオリンピックも流れて

しまったことは、生涯の痛恨事であったが、それでも生き残って、スポーツの復興にいくらかでも寄与することが出来たことは望外のよろこびであった。

命ずる教師ではなく、我に続けの行者たらんと心に念じながらの日々であったが、齢を重ねるにつれて、能力も減退し、年には勝てぬと痛感しているこの頃である。・・・

島根スポーツ100年(山陰中央新報社刊)から

島根師範時代バスケットボールのセンタープレーヤーとして鳴らし、柔道も強かった佐藤が陸上を始めたのはs 10年。安来小教員二年目で町村対抗の能義郡青年団陸上に出場した。この時、100m、砲丸投、円盤投に優勝したのがきっかけで本格的に始めた。

s 12年には島根師範専攻科に入学、陸上に専念する。この年の全山陰陸上・五種競技で元五輪選手・福井行雄と大会史上に残る名勝負を繰り広げ、わずか9点差で優勝した。この時の記録はその年の日本十傑の1位。佐藤はこの頃から東京五輪を目指す。

しかし、オリンピックで何を狙うべきかが分からない。悩んだあげくある日の未明、15年の東京五輪ヘッドコーチに決まっていた野口源三郎に、過去のスポーツ歴、身長、体重、陸上を始めてからの記録を詳しく手紙に書き、助言を求めた。野口の返事は「十種競技をやれ。絶対オリンピックに出場出来る」だった。そして10種目の目標記録があげてあった。目標を得た佐藤は練習内容を一週間ずつ速達で野口に送り、折り返しそれに対する指導を手紙で受ける、という珍しい通信コーチを受けた。・・・

陸上を始めてわずか4年目のs 14年、日本選手権で優勝。この優勝で翌15年開催予定だった東京五輪の候補選手に選ばれたが、戦争が激しくなったため中止となり、せっかくのチャンスを逃してしまった。・・・

「春の生存者叙勲」山陰中央新報 (s 62)から

「スポーツ教育の大切さを認めていただきうれしいですね」と受章の喜びを語る。

39年に開かれた東京オリンピックの日本男子バレーボールチームの強化トレーナーを務めて銅メダル獲得に貢献。52年からは県体協副会長として尽力し、57年のくにびき国体で島根勢が天皇杯・皇后杯を受賞する支えとなった。「好きなスポーツに打ち込みながら、二つの大事業に参画出来たのは幸運だった」と振り返る。

s 10年、当時の国体に当たる明治神宮大会に砲丸投げ、バスケットボール、柔道の三種目をかけもち出場したが、「暁の超特急」と呼ばれた故吉岡隆徳氏に素質を見込まれ、陸上に専念。14年・15年には陸上競技の十種競技で全国優勝二連覇。15年に開催される予定だった東京オリンピックの選手に選ばれた。しかし、戦争のため五輪は延期。「大変悔しかった。それまでは自分のために競技していたが、これからは生き残った者の使命として各種競技、中でも当時広がりつつあったバレーをとことん普及させてやるうと思った」・・・。

先生のお人柄について

ふるさと安来の教育と芸術～出会い、師弟の絆～(庄司誠發氏)から

・・・s 11年6年生の春、運動会100メートル競走を回想して。トップ走者やみんなから、かなり差をつけられて私はH君とラストを争ってゴール。決勝点におられた佐藤先生に二人は呼ばれた。びくびくしながら行くと「一生懸命走っていたなあ。あれでいいんだ。また頑張れよ」と言われた。今でも先生のその時の表情とお言葉は忘れない。私は隣のクラスの生徒であったが、どの子にも心遣いされる教師であった。・・・(同窓会の話)

佐藤先生の「叙勲」に際して、新井春生先生からの手紙

*新井春生氏は「トップコーチ第87号」に登場されたバスケットボールの指導者。

・・・s 14年11月1日、今より50年前、安来小学校高等科2年の時の担任であった先生が、神宮大会で見事、十種競技で優勝され、その時の感激は今も強烈な印象として残っています。当時の各新聞社は、その快挙を大きく報道しました。その時の新聞記事を永く保存しようと、種油にひたし、家宝として大切にしていました。

私の今日あるのも、小学校の時、担任であった先生のお教えの賜で、栄えあるご叙勲に際してこころよりお祝い申し上げます。

バレーボールに係わる話から

バレーボールの指導者として、第一回アジア大会バレーボールチームのトレーナーを務められて以来、日本バレーボール協会の男子強化に尽力された。特にs 39年・東京オリンピック男子バレーボールチームのマネージャー兼トレーナーを務められ、島根大学で強化練習会が度々行われて、銅メダル獲得へ導かれた。

その頃、十種競技の得点をヒントに、選手の基礎体力を数値化した表を、体育館に貼って選手のやる気を喚起されたことは今でも語られている。その時の「バレーボール指数の換算表」は現在でも、改良して使用されている。

バレーボール監督考から(語録) 「試合をするのは選手である」

監督は、選手と一緒に興奮してしまっ
てはいけない。平素の技術練習の時に、
口やかましく、あれこれ注意するのは当
然であろうが、本番の時に、いちいちど

なり散らすことは賛成出来ない。バレーボールは、ネット際での相手との駆け引きが微妙であって、その時のボールの状態によって必然的に生まれてくる瞬間的な「ひらめき」のような判断に支配されることが多い。

「欠点の指摘は出来ても、それを矯正する方法の発見は容易ではない」

陸上競技で、速く走る秘訣は「歩幅を広くして、ピッチをあげればよい」、の2点につける。「お前はももが上がらないから、もっとももを上げろ」と言われても、それだけではどうにもならないのである。結果が見えても、原因が発見出来なければ、本当の意味の指導は出来ない。

「セットの終わりの調子が、次のセットのすべり出しにつながることを忘れてはいけない」

点差が開いて、取り返しのきかない状態になることがよくある。挽回しろとどなりつけて、責任を重くするよりは、1セットを捨てても良いから、「上げ潮」で2セットにつなげるよう、思い切ったプレーをさせて、マイペースをつかませるよう指示する方がよい。

「練習で泣いて、試合で笑え」

平素の血の滲むような練習で身につけた技術を、十分に発揮するためには、勝負の意識を捨てて、生き生き、顔をほてらせ、眼を輝かし、バレーボールが面白くてたまらない、というような、明るいムードにならなければならない。

文責：荊尾 俊

今月のことば

男子選手指導へのヒント

前号で、女子選手指導へのヒントとして、「オキシトシン」というホルモンの存在について書きましたが、今回は男子選手の指導へのヒントとして、書かせて頂きます。

男女とも日常生活やスポーツの場面にかかわらず、ストレスを感じればアドレナリンやコルチゾールといったストレスホルモンが分泌されます。その時女子の場合は、オキシトシン(結びつきのホルモン)のようなストレスを和らげるホルモンが分泌されるが、男子の場合はそれが無く、逆にコルチゾールの分泌によってドーパミンやテストステロンの値が抑えられ、憂うつ状態や不安状態が強まって、自分でストレスを抱え込む傾向があるといえます。しかしそのことがやがては、問題解決や克服、ひらきなおりの行動へのステップになると言うことです。

この男女の違いについて、個人の感じ方にもよると思いますが、私の経験の中から「なるほど」と思わせることがあります。

それは長い間女子選手の指導をしてきて、女子の場合、ある一人の不満がチームのみんなを引き込む傾向がある一方、長時間の猛練習にも耐えるタフさを持っていると感じました。ところが後年男子チームを持ってみると、一人の不満がそれ程チームへ影響しないことや、「自己責任」の意識が強い反面、選手一人ひとりが落ち込むことも多く、心の様子が態度やプレーにも現れやすいと感じました。

スポーツ選手のこととは違うものの、自殺者の男女比較で圧倒的に男子が高いことでも、男子がストレスを抱え込む傾向を持っていることがわかります。

指導者は男女を問わず、全体指導にかたよることなく、選手個々と向き合う時間を多くしたいものです。

競技力向上統括アドバイザー
荊尾 俊